

令和6年12月近江八幡市教育委員会定例会（要旨）

1. 開催日時 令和6年12月26日（木） 午前9時30分～10時50分

2. 開催場所 近江八幡市水道事業所3階 AB会議室

3. 出席委員

教育長	安田 全男
教育長職務代理者	重森 恵津子
委員	西田 佳成
委員	大更 秀尚
委員	圓山 淳子

4. 事務局出席者

教育部長	太田 明文
教育総務課長	岡村 祥子
教育部次長兼学校教育課長	冨江 康子
学校教育課主幹	中村 浩一
教育部次長兼生涯学習課長	清水 和仁
学校給食センター長	眞野 善博
近江八幡市立図書館長補佐	村田 なおみ
スポーツ課長	村田 崇
国スポ・障スポ推進課長	伊崎 裕二
子ども健康部次長兼幼児課長	村北 幸司
教育総務課長補佐	夜野 友昭

5. 会議を傍聴した者 0人

6. 会議次第

【報告事項】

- 12月市議会定例会の質問に対する回答等について
- 令和7年度通学区域の弾力化制度による就学について

【その他】

○「生きる力・生き抜く力」について（意見交換）

○中学校部活動について（意見交換）

7. 議事の経過

(1) 開 会（日程確認）

- ・教育長が12月定例会の開会を宣言
- ・出席委員定数の確認
- ・日程について **承認**

(2) 会議録の承認

- 11月定例会の会議録 **承認**

(3) 教育長挨拶及び報告

教育委員の皆様にはこの1年間、教育課題に正面から向かい合い、子どもたちの生き抜く力の向上にお力添えいただいたことにお礼申し上げます。

先週、2つの目的で学校教育課参事とともに上京した。1つはスポーツ庁大杉スポーツ施策課長との面談、もう1つが渋谷区教育委員会の協力により伊藤渋谷区教育長とともに広尾中学校の探求学習について現場視察へ伺った。

探求学習については、新聞報道でかねてより関心があり、渋谷区ではすべての小中学校の総合時数の特例校としてシブヤ未来科を興し平日の午後は探求学習1色の取組をされている。

広尾中学校では、中学校の1年生から3年生がそれぞれ違うテーマに取り組み、学校のどの場所でだれとでも意見交換を行ってよいことになっていた。その中で区内のプロバスケットボールチームとのコラボ企画、アフリカの国を支援する企画、身体障がい者等のデザインを手掛ける会社とのコラボ企画を学年ごとに進めていたが、現在では、バスケットの試合でアフリカのコーヒーを販売し、出た収益をアフリカへ寄附をする、そしてコーヒーのポップデザインはデザイン会社とコラボして作成するように1年生から3年生まで全体の企画となっていることを拝見した。あらかじめテーマが生徒へ与えられ、それを掘り下げる取組であった。私としては、それに加えて、生徒自ら課題を見つけだし解決に向かうような探究学習が必要ではないかと感じた。

12月25日には、教育研究発表大会でウスビ・サコさんの講演会を拝聴した。講演会では広い知見のもと、自分の体験を自分の言葉でお話いただいたことを実感したところである。講演会后、リベラルアーツを進めていくためにデータサイエンスとAIの関係について質問し、回答いただいた。この内容については後日お伝えしたいと考えている。

(4) 議事

●報告事項

◎12月市議会定例会の質問に対する回答等について

【事務局説明】…教育総務課

【質問等】

○教育長

部活動に関する質問を三上議員からいただいた。保護者への説明スケジュール等について回答したのでご確認いただきたい。

その他、図書館に関する質問が多かった。安土図書館について、駐車スペースについて、近江八幡駅南側に3つ目の図書館を作ってはどうか、との質問をいただいた。回答としては8万人規模の市において3つ以上の図書館をもっているところは少なく、貸出冊数も年々伸びていることから図書館数と市民の利用者数は必ずしも比例していない現状であり図書館の数を増やせばよいということではないと考えている。

子ども・若者育成プロジェクトで、集まってもらう市民や学生が気軽に学ぶことができるスペースについて今後検討したい旨を回答した。

◎令和7年度通学区域の弾力化制度による就学について

【事務局説明】…学校教育課

【質問等】

○大更委員

これまで農地の地番等の関係で校区は設定されているが、線路をまたいで校区が編成されていることについて保護者はどのように考えているのか。これまでの経過もあり改編は困難であると思うが、地番にとらわれることなく検討できればよいのではないかと思う。

○教育長

ご意見として伺う。

8. その他

◎「生きる力・生き抜く力」について（意見交換）

【事務局説明】…学校教育課

【質問等】

○教育長

最近のプロジェクトの状況を担当から説明した。また委員のみなさまには関連するような研修も受講いただいている。その他さまざまな情報を参考としていただき、それぞれの考えをご披露いただき意見交換できればと考えている。

○大更委員

学校訪問のなかで、高校・大学との関りを中学校の学びに活かせばとの話もあった。中学生の子どもたちが高い学びを体験できればよいと思う一方、教育特区や特例校として取り組めればよいが現在の教育課程に基づき進めていくには学校現場では難しいのではないか。

教育特区や特例校を導入することを前提に数年かけて何をポイントに学ぶかについて整理すればよいのではないか。探究学習や調べ学習などでは、学校の先生を巻き込む必要がある。このようなことを考えると地域での学びが重要となり、そこから課題をとらまえて取り組むことが大事である。ただ、先生方が良いと思えるような明確な目的が必要で、学校の先生の思いを取り込んだ取組にならないことを危惧する。

○教育長

大切な観点である。先を見とおしたうえで、そこに達するまでのプロセスを考えていくことが大事であるとの話であると感じた。3月中にはプロジェクトの考えをまとめてもらう予定であり、それをふまえて教育研究所にてプログラムを考えていくこととなる。そのうえで中学校以降の見通しや高校・大学・起業・地域との連携がどのような授業時数であれば可能かを研究することになる。現場の教員の理解がないまま進めることは本位ではないので、現場教員や保護者の共感を得ながら滑らかに進めていきたいと考えている。また、保護者の理解も必要である。仮に特例校に移行するとなった場合には保護者との懇談の場が必須となっているので、今まで教育委員会と保護者とが直接かかわる機会がなかったが、これを機に設けて意見交換を重ねて検討を進めたいと思っている。

○大更委員

特例校等では教育課程とは別のカリキュラムを組むことになる。これまでの取組がおろそかになるといった指摘が最も怖い部分であり、今回の取組が子どもたちのためになる学び方であることを十分に説明する必要がある。

○教育長

プロジェクトチームの視察先や渋谷区の実績は今まさに始まったところであり、これから実績が明確になる。本市は2～3年先の導入を想定して取り組んでいるので、先進地の取組を評価していく必要がある。保護者との懇談会でも説明に耐えられない可能性はある。これまでのカリキュラムは、近年の学力・学習状況調査を見ても、このままの状態を続けることがベストであるとは思わない。選択肢として十分に評価しながら徐々に進めていきたい。

もう1点、「誰一人取り残さない教育」を進めているところであり、全国的にも同じ理念の動きはあるが、「誰一人取り残さない教育」のイメージは教員・保護者・教育関係者では違うと考えている。保護者は、学校に行きづらい子どもや障がいをもつ子どもたちが学校に行き同じように勉強させてあげたいというだけでなく、社会で活躍できるようになることを期待していると思う。これには市長も同じ考えである。行政や教育関係者は無事卒業させてあげたいということにとどまりがちだと思うが、社会で活躍することまでを見通した時に、行政・教育としての支援のありかたが今後問われていくことになる。このような取組を子ども・若者育成プロジェクトで施策として打ち出していく予定である。

○重森委員

質問だが、プロジェクトチームのメンバーはどのような構成か。

○学校教育課

就学前については私立保育園・保育所等の園所長から2名、公立の幼稚園・保育園等から2名出席、小学校・中学校の校長からそれぞれ2名、事務局は幼児課から2名、生涯学習課から2名、学校教育課から2名、教育研究所から1名の15名で構成している。

○重森委員

生きる力は日常、生き抜く力は非日常で発揮されると分けて考えられたことに納得している。大更委員からもあったように先生方を巻き込みながら、それぞれの学校現場に適した取組を考えていくのに2年以上かかるということであった。早い段階から先生方に関わってもらうことでよりよいものができると思う。管理職がよいといってもなかなか実感が得られないと思う。これからを担う先生方と一緒に熱意をもって一緒に取り組んでもらいたい。

渋谷区の実績のなかで、与えられた課題ではなく課題を見つけることから始める必要を教育長が感じられたとのことで、本市では総合的な学習が出てきた経緯にも関係するが、自分たちでテーマを考えることができる土壌づくりが必要だと思う。

○西田委員

正解のないものへの対応や多くの方に納得してもらえる方法を身に付けられることは大切だと思う。学校で学んでいることはインプットが多い。学生時代は、大人になれば様々な選択を行うために必要となる中道(ちゅうどう)

を身に付けるための準備期間だと考えている。中道を身に付けるためには多くの方と関わりいろんな考えを聞いて情報を蓄積することが必要である。生き抜く力のなかで最後までやり抜く力を養うとあったが、個人的には逃げる力も必要であると考えている。最後までやることの必要性を教える場面が多いが、自分の命を守るためには逃げることも1つの選択肢であることを教えておく必要がある。これにより子どもたちは楽に考えることができるのではないかと思う。

○教育長

身の危険を感じた時の避難といった感じだと思う。

○西田委員

戦うことも大事だが、生き抜くためには逃げる選択肢を持つことも重要であると思う。そのような選択肢をもつためには様々な経験が必要であり、学校での学習は大きな要素であると思う。

○圓山委員

昨日の講演会で、地域の方にいろんなことを教えてもらったことが自分を成長させたと話されていたが、自分自身も地域の方とたくさん関わって経験したことが自分を豊かにできたこと、それが自分らしく生き活きと活動することで、他の方を支えられる関係性ができていると考える。昨今は、核家族といった昔に比べて小さな世界になっているが、地域の方との関わりや体験できることで経験が豊かになるような授業を進めてもらい、参観などで保護者にも観てもらうことによって良さを知ってもらい家族でボランティアへの参加への一歩になるのではないかと考える。

○大更委員

講演会の中で、たくさん失敗してきたと話されていた。小中学校では学び方を学ぶ場所だと思う。学び方を覚えるために失敗など様々な経験と通じて習得し、大人になったときにその経験を活用することが生き抜く力につながると思う。小学校では正しいことを覚えるということではなく、学び方を勉強する機会ととらえると気が楽になるとも聞いたことがある。学びに様々な選択肢があることは望ましいと思う。その1つとしてS S Rもそうだと思うが、全てそれに頼ってしまい、その後のサポートまでは考えられていないように思うので、良い取組ではあるが子どもたちの成長を考えると不安に思う時もある。

○教育長

私も同じ考えである。子どもたちの適性に応じた学びの環境にある子どもたちを、将来どのように支援するかという共通認識とそのための施策が必要である。個人としては、子ども・若者育成プロジェクトがその指針になると考えている。支援が必要な子どもたちをプロジェクトへつなぎ、企業など様々な方々の支援を得ながら社会へ送り出せるところまでを見せることでS S Rの取組などの意義もあるように思う。

○教育長

このテーマは簡単なものではない。定例会にて第1回目の意見交換を行い各委員の意見をうかがうことができた。今後も議論を重ねながら施策へ反映させていきたい。

◎中学校部活動について（意見交換）

【事務局説明】…学校教育課

【質問等】

○教育長

部活動主事の状況や令和7年6月の説明会開催に向けた準備状況等について事務局から説明した。これらを踏まえて各委員からご意見をいただきたい。まず、保護者としての懸念事項など圓山委員から意見等はないか。

○圓山委員

部活動を行うにあたり優秀な指導員が来られた際に部員がその部活に集中し、他の部活の人員が少なくなることはないか。

○学校教育課

実際あると思う。人員が少なくなった場合は例えば市内で拠点校を設けて集中して取り組むなどの対応もできている。魅力的な指導員が来られてその部活動が活発になることは否定的なことではないと考える。生徒がやりたい部活動に取り組めるような体制を作ることが必要であると考えている。

○圓山委員

拠点校で取り組むまでの間に廃部になるようなことはないか。

○学校教育課

活動したい生徒がいる限りそのような事態は避けたいと考えている。

○圓山委員

丁寧な対応をお願いしたい。

○西田委員

例えば、前任に顧問の指導方針と後任の指導方針が異なり、子どもたちが混乱する可能性があると思うが、その調整はどのように考えているか。

○学校教育課

部活動指導員か教員が顧問を担うことになり、考え方の違いによりチーム作りは変わることは想定できる。これに関しては、部活動指導員と教員が共同で指導方法を考えてもらい協力しあいながら指導に当たってもらいたいと考えている。指導内容等については日々共有してもらい必要があり、アプリ

の活用などによって指導方法の一元化できる仕組みを構築したいと考えている。

○教育長

部活動主事を各校に配置するので、部活動主事が調整することになると考えている。

○学校教育課

これまでも異動により顧問が変更になった場合にも同様のケースがある。その際のノウハウについては研修等を通じて伝えながら進めていきたい。

○大更委員

大都市にはクラブチームなどの多くの組織があり部活動をやめてもよいという流れがある。本市では、中学校の部活動は社会性の育成やスポーツ等の振興の観点で進めていくというスタンスであれば、そのことについて伝え続けていく必要があると思う。

○重森委員

新しく部活動主事が8名加入され、そこに部活動指導員や学校の先生方がいらっしやり、様々な立場の方が子どもたちのために尽力してもらうことになる。これらの方が有機的に連携して本市の中学生が活動できるのは素晴らしいことであるが、部活動主事は初めての業務で関わっていただくこととなり、場合によっては大学新卒で就業される方もいらっしやると思うが、これらの方々が現場で迷わないよう、また部活動主事がいてくれてよかったと思ってもらえるよう教育委員会で丁寧な対応が必要であり、お願いしたい。部活動主事が「何をすればよいか」と思わなくてもよいように準備をお願いしたい。

○教育長

教育委員会でも準備や研修を行い、部活動主事への研修等を行い、成長してもらいたいと考えている。

9. 閉会

教育長が12月定例会の閉会を宣言